

# ラボ会員が英語で書く「とっても短いお話」(ESS)の 育成的評価法について

本名信行

(青山学院大学名誉教授)

## 論文の概要

ラボはテーマ活動をとおして人間教育を目指しています。そのなかで、英語による自己表現能力と他者理解能力の育成が求められます。本稿ではその方法である ESS(C)の推進にあたって、育成的評価（フィードバック）の重要性を考えます。また、チューターはラボライブラリーを読み込み、聴き込んでおり、フィードバックに適切な人材であることを確認します。

## キーワード

ESS(C) 英語自己表現能力 育成的評価 フィードバック good reader 読み聞かせ

### 1. はじめに

ラボ会員（以下、ラボっ子）はテーマ活動のなかで、かなりの英語力を蓄積しています。それは英語の「自己表現」能力につながるレベルです。それを活性化し実用化するのにはいろいろな方法が考えられますが、本稿では、本誌2号と3号でも触れているとおり、「とっても短いお話」(Extremely Short Stories)を利用して、50語英文を書くことの意義を強調します。

そして、ラボっ子の「英語で表現したい」気持ちをどう育むか、チューターはラボっ子の作品にどのようにフィードバックするかについて論じます。特に、チューターがラボっ子作品のよいところはなにか、不十分なところはなにか、これらを子どもにどう伝えるか、などに注意する意義を考えます。

これらの考察にあたって、2020年度に2回にわたって全国教務委員会有志の方々と教育事業局関係者とのオンライン研究会を開催する機会を得ました。そこではさまざまな有意義な意見が表明されました。以下で、その意見の一部を紹介させていただきます。共同研究に参加していただいた方々に感謝の意を表します。

## 2. 育成的評価とはなにか

ラボっ子の英語自己表現能力を育て、その発達を見守るのには育成的評価が必要です。評価というと、どうしても **grading**, つまり学校の試験の採点や期末考査の段階別成績評価を思い浮かべる向きも多いようです。ここでいう育成的評価とは、そのような意味合いはまったくありません。ラボの ESS プログラムでは、ラボっ子の英語自己表現能力を育てるために、チューターが作品に一言添えるフィードバックのことです。

これはラボだからこそできる指導法です。チューターはラボっ子の英語活動を長期にわたって見ており、子どもの成長を目の当たりにしています。だから、作品のモチーフや表現の仕方になるほどと思うところがあるでしょう。そのなかで、この子はこんなことを書くのか、こんな言い方をするのかと驚嘆することも数多くあるはずですが、ここで、チューターの一言が効いてきます。

それは子どもに自分の意図が理解されたという喜びを与え、もっとやろうという気を引き起こすでしょう。また、チューターのちょっとした一言が、ラボっ子の進歩への道標にもなるでしょう。こうしたフィードバックは関わりの深いところでしか生まれません。残念ながら、学校などの環境では無理なのです。ここにラボパーティの意義があるのです。

## 3. 育成的評価のためのコメント練習

ここで、具体的な事例をもとに、このような育成的評価（フィードバック）の内容と方法を考えます。まずは、「ことばの宇宙」2020 春号掲載の ESS 作品のいくつかについて、上記研究会の参加者のコメントを見てみましょう。次に、同じく同年の作品で同誌に掲載されなかったものについてのコメントを紹介します。

なお、2 回の研究会では、英語の構造（構文や文法など）に関するコメントが少なかつたような気がします。そこで、私が気になった点を少々追加してみました。私はラボのテーマ活動は英語教育でもあり、その延長上に ESS(C) があると考えているからです。この点については、最後に言及します。

### 3.1 「ことばの宇宙」2020 春号に掲載された作品についてのコメント

#### (1) Milk

I'm milk. I'm one of the top of nutritious food. I'm used for various dish and I can become friends with bitterness like coffee. By the way, I will show you a secret. Hey, you! Could you pour me into a bottle? Then shake me many times! Hi! I'm butter. (大 3)

T1: 自分 (I, Milk) が **butter** になるのではなく、次の瞬間、自分 (I) は **butter** です、というくだりがとても面白いですね。I が自由に変わっていく。作者の心の、伸び伸びとし

た自由さを感じます。

T2: Hey, you! で、読み手にぐいぐいと語りかけてくる書き方も素敵です。読み手を引き付ける力を感じます。

T3: 発想がすごい！と感じました。“I will show you a secret.” でぐっと引き込まれ、そこから "Hey, you!" に繋いでいくセンスはどのようにして育ったのか知りたくなりました。

T4: 最初は丁寧に入り、だんだん調子が上がってくる印象で、キャラクターが生き生きと感じられました。筆者がミルクをどんな風に楽しんでいるかも伝わってきます。

本名：日本人学習者が難しいと感じる名詞の単数形・複数形を大体マスターしている。

## (2) ZERO

There were ten cookies on the table. First, mother ate one of them and went away. Second, father ate one of them and went away. Third, sister ate one of them and went away. After that, I ate some of them and went away. Question; How many cookies are left? (中3)

T1: 先生のコメントの「答えがタイトル」の意がよく分からず、作者の子に確認してしまいました(同地区、顔なじみの子です)。その意がわかり、"some" の使い方や、"some" を捉える遊び心(柔軟な解釈をこの年齢でできること!)に感動です。そして答えをタイトルに持ってきている事に、「座布団一枚追加!!!」的心情になりました。

T2: 統一された文章でわかりやすいです。クイズになっていて、タイトルが答えになっているのはすごいアイデアだと思います。

T3: テンポがよく、読んでいて楽しかったです。“Elizabeth, Elspeth, Betsy, and Bess”のようなひっかけ問題で、パーティの子と楽しんでいる様子が目に浮かびました。

本名：これはクイズだそうです。よく考えられていて流れにリズムがあります。答えはタイトル。なるほど。限られた語彙でこんな面白い遊びができる。使っているのは20語くらい。遊びは知的活動、イマジネーション。書くことが求められたから、こういうことが書けたので、ESSの意義が分かるでしょう。

## (3) Happiness

We can't touch it. But we can find it. We can't catch it. But we can become it. We

can't see it. But we can feel it. It's no wonder. Every person has your own happiness. They don't have same one. My happiness comes from within. Where is your happiness?

(中2)

T1: 伝えたいことが伝わってくる、素敵な文章です。伝えたいことを伝えよう！という思いで書かれた文章に力強さを感じます。

T2: よく耳にする単語、同じ単語を繰り返し使っているのが逆にシンプルでわかりやすい。ストレートに伝わるものがあると感じました

T3 文の内容がとても素敵です。伝えたいことが真っ直ぐに伝わってきます。

T4: 素直な気持ちが心地よく伝わってきました。自分の考えを押し付けるのではなく、問いかける姿勢も素敵だと思います。

本名：タイトルが Happiness なので、it が happiness と分かります。We can't..., but we can...の連続と、touch/find, catch/become, see/feel のコントラストが効いています。My happiness comes from within. の感じ方、Where is your happiness? の問いかけはみごと。また、“become it” で、become のあとにくるのは、本来は形容詞か名詞。これはなかなかできない語法的冒険。でも本人はそんなこと考えてないでしょう。ただやってしまうのです。Every person has your own happiness. では本来は his or her のはず。ここで your になったのは、対面的コミュニケーションを意識しているからでしょう。Every person=They も OK。

#### (4) Wonders about this world

Once I thought about how animals tell each other information? How do they tell their kids how to hunt for food and fight for territories? Researchers say that animals (non-humans) don't have a language but they communicate by gestures and sounds. It is really fun to learn new new things! (小6)

T1: How を何度も繰り返し使うことによって、ホントに不思議で疑問に思っていることが、より強く伝わってきます。説得力のある素敵な文章だと思います。学ぶことが fun なのも素敵なことですね。

T2: 小学生とは思えない語彙力に驚きました。気になることを突き詰めて探っていくの

は動物に限らず，ことばに対しても同じなのだろうと感じました。

本名：new new things! は，new [new things]（新しい「新しいこと」）だから。

#### (5) My favorite things

Yellow shirts and purple skirt, dancing and singing, wearing silver earring my mother made, these are my favorite things. Playing the piano, watching TV, reading novels, these are my favorite things. Eating pasta and hamburger, drinking tea, baking cute cookies, these are my favorite things. I am happy with them. (小5)

T1: ミュージカル映画「サウンド オブ ミュージック」を彷彿とさせる文。声に出して読んでみて，とても気持ちがいいです。shirts と skirt(s) だったり，...ing と ...ing だったり，対にする言葉の選び方もお見事です。この映画，是非観てくださいね。

T2: 同じ感想です。また，SK-17 の中のポエム”What is Pink?”も思い出し，この子の中にたくさんのことが詰まっているのかしら？と読んでいて微笑ましく感じる作品です。

T3: ナーサリータイムをすごく楽しんで育ったのでしょうか？とてもリズムカルで心地よい文章だと感じました。

T4: みなさんに同感です。音楽が流れてくるような心地よさを感じました。好きなものを並べてダンスを踊った後に，”I am happy with them.”と着地しているのが素敵です。国際交流に行ったら，こんな風に気楽に好きなものをホストとシェアしてほしいです。

本名：wearing silver earring my mother made,と関係詞構文（that, which の省略）を使っている。習ってないはずだから，どこで覚えたのか。

### 3.2 同誌に掲載されていない作品についてのコメント

ここでも，それぞれの作品のよいところに目を向け，作品の中でどのような表現がよかったかなどを具体的に伝えるかを考えます。子どもは褒めれば必ずやる気を出します。また，不十分な点をどのように伝えるかも大切です。ラボっ子の自己調整能力を育て，自律的学習を促します。

#### (6) Nagasisoumen

We had potluck party. We had more than twenty guests. We did nagashi soumen. That is a kind of Japanese eating style. When you try it, you have to catch the noodles flowing in a bamboo pipe with your chopsticks. After that we eat watermelon. It was

funny and yummy. (小4)

T1: 「だるまちゃんとかみなりちゃん」を連想した。ライブラリーをよく聞いている子だなと嬉しくなる。

T2: 彼女の作品は funny と yummy を重ねて韻を踏むなどといった日本的な考え方が素敵。きっとこの音が心地よく耳に残っていて、楽しいという感情があったのだと思う。韻はナーサリーライムでもよく出てくるから。彼女にことばをかけるとしたら、「funny と yummy の響きが耳にも優しく、スペルも似ているね、身近な音で気持ちいいね」と褒めてあげたい。

T3: ナーサリーライムを普段から楽しんでいる様子が伝わってくる。funny と yummy は流れで身につけているものだった。a bamboo pipe という表現は、竹の筒を切っただけで使う日本人ならではの発想でもあったと感じた。私なら「pipe のイメージは「筒」なので、流しそうめんを知らない人が読んだらどこから麺を救うのかイメージできないかな？あの形をどう表現したら伝わるかな？」と訊いてみたい。

T4: どこかで聞いたことのある物語フレーズや状況につられて、そのことばを思い出しながら活用していると感じた。

T2: 国際交流に行く子には、日本の文化を外国人に伝えようという意識を大切にしたい。このように日本の風物詩を話題にしたのは偉いねと伝えたい。

本名：複数形は全部できているところがミステリアスで面白い。また、文章は、冠詞以外は完璧に近く、文章構成能力も発達している。

事務局1：耳から入ってくる音声の蓄積があるからこのような表現ができる。例えば、箸が複数形なのは普段からラボ・ライブラリーに親しんでおり、chopsticks という音で記憶しているから、複数形が自然にでてくるのだと思う。

#### (7) Interview with Petunia

She is Petunia. She looks so wise. Because she has a book. But she's very silly. Let's interview her!

S: Hello, Petunia!

P: Hello!

S: Is it true you can multiplication?

P: Yes, I can! I can multiplication.

S: But you said, "three time three is six" didn't you?

P: Yes, sure! I'm collect.

S: Oh, no! (中1)

T1: ライブラリーの単語をよく使っている。お話を楽しんだ様子が伝わってきて素直に嬉しい。

T2: 元気で躍動感のある文章、シンプルな表現、短い文章の繰り返しなのも素敵。

T3: インタビューを Hello, Petunia! から始めているのがよい。

T2: I'm collect. の表現にすることで<sup>(注1)</sup>, 自分を賢いと信じているペチュニアの様子が伝わってくる。

T4: 自分は正しいわよ, と主張するペチュニア。それを注意させる状況を書けるのがすごい。

本名: 中学生なので, can multiplication→can do multiplication, can multiply とか, 掛け算の正しい表現である three *times* three を伝えてもよいのではないか。前者はペチュニアのことばだから, まあいいか。後者は自分のことばだから, しっかりとしましょう。

(8) I am blessed with friends.

I am blessed with friends. A kind friend. A smart friend. A funny friend. A cute friend. I am happy to have so many friends. But I am not satisfied. There is one friend I want. It is a friend that stays by my side forever. I want a friend. (高1)

T1: たくさんの友達がきつといるのだろう。そんな友人を形容する単語をいくつも並べてくれているのが嬉しい。前向きなことばをたくさん知ってほしいし, いろんな所で使ってほしい。同じ文章を書くにしても, 彼女の場合, 沢山の物語に親しんだ上で豊かな語彙が蓄積されているようで嬉しい。

T2: But I am not satisfied. There is one friend I want. この表現から, 恵まれているとうたいながらも, 満たされないという思いは多くの人が共感するのではと思う。簡単な英文で, こころの深い部分をうまく表現しているなど感じた。

T3: 最後に本音を吐露している。そのため最後は, I want such a (or that) friend. とするほうがよいのでは。

本名: そう, 伸びる時にパット伸ばしてあげることが大切。伝えるべき時にうまく伝えれば子どもはすぐに伸びる。教育的介入は常に必要。

(9) Regret

There's a button nobody knows the mystery. It was written "Don't push" in red. The child saw this button and thought, "I feel like pushing if you write not to push." He pushed it and went to another planet. He felt sad. He found another button. What will he do? (高1)

T1: 星新一氏を思わせるブラックユーモア。ラボっ子の作品を見ていると投げかけで終わる文章が多い気がする。コミュニケーションをとるものとして言葉を駆使していると感じた。

T2: ダメと言われるとやりたくなるという子どもの心理がよくわかる文章。面白い。子どもの頃を思い出して書いたのかもしれない。

T3: "I feel like pushing" の表現をさらりと使いこなしているところが素晴らしい。

本名: a button nobody knows the mystery は whose mystery nobody knows にできないか。関係代名詞は理解していると思う。英語の複雑な構文がわかってきているので, あと少し。

## (10) My failure

If I could go back in time, I would return to the day I had an argument with my best friend. I broke his iPhone but pretended that I didn't do anything to it. He never talk to me since then. I would like to apologize to him for what I did sincerely. (大2)

T1: 反省して後悔していることが切実に伝わる。正直に飾らずに書いているところに作者の人柄を感じた。

T2: 内容を読むと、作者はとても正直者だと思う。仮定法を使う表現は物語の中にたくさん出てきて、「なるほど、文法解説を聞くよりお話の中で学んだ方がわかりやすい」と思うことがたくさんあった。この文章の動詞の使い方は全部正しいだろうか。作者が大学生なので、ちょっと細かく考えてしまう。

本名：never talk to me は never talks to me。指摘すれば、すぐ気づくはず。

これらの作品で、ラボっ子は自分の言いたいことを素直に表現していることが分かります。チューターはときに「書いてごらん、と投げかかるだけでは、子どもはなかなか書けない。タイトルを与えた方がよいのではないか」と思うことがあるようです。しかし、ラボでは基本的には好きなように書くようにしたほうがよいのではないのでしょうか。題を与えるのはいかにも学校的です。ラボっ子は書きたいことがたくさんあるはずです。

好きなように書くように導くためには、いろいろな工夫が必要です。それがチューターの励ましです。自由に書くことで、発想力、表現力、文法力を育てるのです。そこに個性が出て、自分らしい作品が生まれます。英語に操られるのではなく、英語のマスターになるのです。

事務局で ESS(C)を担当しているスタッフはこんなことを言いました。「毎年、応募作品を見て、書くことが好き、表現を楽しんでいると感じる。以前、事前活動で英語で自己紹介をやったあと、次はフィクションで自己紹介をしてもよいと言ったら盛り上がった。英語の自己表現でも、想像力を発揮する余地があるほうが楽しくなる。」

チューターのひとりもこんなことを述べていました。「口頭でゲームとして楽しんでいた Who am I? から、英語の文章を書くことにつながった。」チューターの励ましたとアドバイスがあれば、ラボっ子は自発的に発想し、それを書き下すことができるはずです。

## 4. コメントからフィードバックへ

上で報告したように、チューターのコメントはとても親身なものです。ラボの経験から、ラボっ子の心情をよく汲み取り、書く姿勢に敬意を表しています。部外者ではとてもこうはいきません。チューターは子どもの成長を見守ってきており、子どもがどのような英語学習の段階にあるかを知っているのです。

現在、ラボ・パーティでは、ラボっ子の ESS 作品に対してチューターがフィードバックする習慣はないようです。これは実にもったいないことです。フィードバックをすれば、

子どももっと伸びるはずです。ラボ・パーティの現況を考えて、フィードバックはほんの1、2行でよいと思います。以下のことを指針にして、やってみませんか。

どんな不十分な作品であっても、「箸にも棒にも掛からぬ」などと思わないでください。必ずよいところがあります。伸び代があります。それも見極めて、一押ししてみましよう。「ここが惜しい～」というところがあれば、そこをどう注意すればよいかを各自で考えましよう。子どものことを一番よく知っているのは、チューターです。

チューターだからこそ、適切な注意ができるというものです。ただし、今回の研究会では、こういったケースでの声掛けや伝え方については、討論できませんでした。次回の機会があれば、チューター個人の手に余る「今一」の文章をどう評価し、その不十分なことをどう伝えるかを話し合いたいと願っております。

たしかに、このような作品は、こちら側に多くの課題を投げかけてくれます。テーマや内容が魅力的でありながら、英語の構文や表現が不十分なときに、チューターはなんとかしたいと思うはずですが、そこをどう伝えるか、すなわちどのようや助言をしたらひとりひとりが伸びるのか、を考える必要があります。

もちろん、子どもに英語の間違を恐れないように伝えましよう。たくさん間違えれば、たくさん覚えられるのです。ラボっ子はもっと英語を使い、自分のものとして使いこなす訓練が必要です。ラボの ESS(C)プログラムは、表現に点数や ABC をつけるものではありません。書くことが楽しいと思える気持ちを応援し、そこを伸ばすためのものなのです。

#### 4.1 フィードバックとは

ここでいうフィードバックとは、チューターがラボっ子の ESS 作品を読んで、思ったこと感じたことを伝えるものです。なにかすごいこと、気のきいたことを言わなければ、などと思う必要はありません。かしこまらずに、自然体でどうぞ。子どもの表現力を伸ばすことだけを考えましよう。

##### 4.1.1 なにについてフィードバックするか

だいたい、以下の枠組みが考えられます。

- (1) 作品のテーマ（構想やイマジネーションの素晴らしさ、など）
- (2) テーマの内容（テーマの進め方のよい点、など）
- (3) 英語表現（ラボで学んだものが使われていることの意義、など）
- (4) 英語（文法、語彙、スペル、など）
- (5) その他（各チューターの思いつくことがら）

なお、フィードバックは口頭で伝えても、書いて伝えてもけっこうです。書く場合には、

もちろん長いのもけっこうですが、短く 1, 2 行でもかまいません。たくさんのラボっ子がいるパーティとか、継続的に実施しているところでは、短いアドバイスが実際的でしょう。作品に一言そえるのです。

#### 4.1.2. フィードバックの練習

次の作品を例にすると、あなたは作者にどんなフィードバックをしますか。上の枠組みを参考に考えてください。

A message from 149,597,870 km away from the earth

Hey! Are you still wearing that long-sleeved shirt? No way! Take it off or I will make you do that. I`m always good at making humans dress lightly. But I find out I can`t remove things covering faces whatever I do. Will you show me your shining smile some day? (大 1)

私のフィードバックはこんなふうです。「北風と太陽のコロナ禍版。着想、内容、英語が実にいいです。ワシは人間を軽装にする能力があるが、このマスクだけははずせないと嘆く。最後の Will you show me your shining smile some day? に作者の思いが感じられます。」

「テーマ」「流れ」「英語」について言及しています。

私は作者のラボ活動を知りませんが、なにかアドバイスをと思って書きました。一般的なことばになっているのは、このためです。チューターは自分のパーティで作者を知っているとすれば、もっとこまかい、深いフィードバックができるでしょう。フィードバックも書けば書くほどの的を射たものになります。そして書くのも楽しくなります。

#### 4.2. チューターはなぜラボっ子の信頼を得るか

チューターはラボ・ライブラリーを綿密に、確実に読み込み、聴き込んでいるので、グッドリーダーあるいはディープリーダーの素養をもっていると考えられます。リテラシーの訓練は人間の脳内に「広い心」を育て、「共感」の能力を高め、「他者」への思いやりにつながる神経回路を開発するといわれています。さらに、イメージの喚起機能も開発します。

チューターはこのような能力をもっているために、ラボっ子の発言や作文を「深く」読むことができるのではないのでしょうか。そして、子どもの言語表現の本質を的確にとらえ、子どもの発達状況を見据えて適切なコメントをするのではないのでしょうか。これは、上記 3 でみたコメントによく表れています。

事実、「リーディングでブレインになにが生じるか」を研究する神経言語学・神経科学の最近の知見では、こんなふうにいわれています。人間にとって「言語」を生得的ですが、「読書」は後天的な能力で、文字の発見（創造）から 6000 年ほどかけて形成されたものです。1 語 1 文を読むためには実の多くのニューロン（神経単位）が作動します。

リーディングは「注意力」と「洞察力」の神経回路を育成し、さらに他者を思いやる心を培うことが明らかにされています (Wolf, 2008, 2018)。人間は読書により、他者の世界をめぐり、また自分の世界に戻るのです。読書で自分が一人ではないことを学ぶというの

です (We read to know that we are not alone. [Wolf, 2018, p. 45])。これはラボにとっても興味深いでしょう。

また、リーディングはイマジネーションの神経回路を開発するともいわれています。次はアーネスト・ヘミングウェイが記した世界最短の英語小説 (6字) です。For sale: baby shoes, never worn. (Wolf, 2018, p. 41) 読者のイマジネーションを彷彿させるからでしょう。これにもとづき、あるチューターはこんなストーリーを創作しました。

我が子の誕生を楽しみにしていました  
初めてのことで、何をどうしてよいのか 全くわかりません  
準備する物が必要と気づき、真っ先に準備しました

一人歩き始めてもすぐ転んでしまう姿、泣き出す我が子・・・  
「いたかったね」と声かけながら手を取り、親子3人でのお散歩・・・  
暖かい春の昼下がり・・・

全て夢に終わってしまいました

私の夢を叶えてくださる方に差し上げたいと思います  
暖かい春の昼下がり  
楽しいお散歩に たくさん使ってください

多くのチューターはこのストーリーに共感するでしょう。(ただし、この作品は On sale: を読み込んでいないことに要注意) 同時に、自分なりの、まったく違ったストーリーを浮かべることもあるでしょう。このようなイメージの想像は、グッドリーダー、ディープリーダーだからこそできる活動なのです。まさに、打てば響くのです。

子どもは文字の読み書きの学習を通じて、この神経回路を開発します。また、「読み聞かせ」もこの回路の開発に有効です。もちろん、演劇 (テーマ活動) もこの能力開発に適した活動といえます。ラボ・パーティでは、チューターの読み聞かせも大いにやっていただきたいところです。

CDの音声にCDを聴き込んだチューターの読み聞かせがあれば、まさに鬼に金棒です。子どもはCDを聞き、次にチューターの顔の表情としぐさを見て、物語の真意をつかみます。チューターの読み聞かせが加われば、子どもの学びが広がります。子どもはチューターの読み聞かせをとおして、物語を現実的に把握するでしょう。

朝日新聞の「ひととき」欄に、「涙、何でだろう」と題して、こんな投稿がありました (2020.10.10)。読み聞かせで、子どもは物語をそらんじます。それは大脳の考える、感じる回路につながるのです。ラボのテーマ活動のなかで、ここにいられているようなことは、

どこかで生じているのでしょうか。

「娘が夜勤の日、私は7歳と4歳の孫と一緒に寝る。寝る前はいつも、「バァバ、読んで」と催促してくる。昨日は、「小公女セーラ」を読んだ。7歳の孫娘は、この物語を覚えるほど何度も聞いている。いつものように読んでいると、「バァバ、何でだろう、涙が出た」と目頭をふいている。…本を読んで感動し、心を震わせた初めての経験だったようだ。…」

読み聞かせで英語の発音を心配する向きもあろうかと思えます。その心配はまったくありません。子どもはチューターの楽しそうな、悲しそうな、あるいは情熱的な話すと、自分に向けられた視線に心を奪われます。そのなかで、英語の表現を口にし、頭に入れます。英語の発音だけに気を取られる子どもはいないでしょう<sup>(注2)</sup>。

#### 4.3 チューターの疑問

ところで、前述の研究会では、多くのチューターから、いろいろな疑問が寄せられました。「書くことがあまり好きでない子、そもそも書けない子にどう呼びかけるか」はその一例です。もっと具体的には、「中学生までのすべて、そして高校生ですらほぼ、英単語の羅列しかしないのに、構文を理解して自ら英作文の出来るようになるには、どのように子どもたちの自発的活動を促すのか」という声もありました。

これは実際に書いてもらうしかありません。ラボっ子に紙を1枚渡して、好きなことを書いてごらん、面白いよ、と言う。書いたら、チューターのフィードバックで必ずよいところを指摘し、褒める。子どもによっては、不十分のところだらけかもしれません。それでも、よいところは必ずあるはずです。そこを誉め、子どもにそのよさを実感してもらう。

子どもは自分がやっていることに意味があると思ったら、大変なことでもけっこうやるのではないのでしょうか。モチベーションがあれば続けるでしょう。その子にどうしたらやる気を起こさせるかを一番よく知っているのはチューターでしょう。その経験と役割を生かして、いろいろ試してみてもどうでしょうか。

不十分なところを指摘しても傷つかないなと思う子どもには、そのところをアドバイスする。これは子どものことをよく知っているチューターだからこそできるのです。とにかく書くことを促す。今まで出来ないと思っていた子でも、書いてみるとけっこうできるのです。書いては褒め、書いては褒め、その繰り返しが書くことの定着につながります。

また、「通常のラボ活動のなかで、英作文を書く時間を持つことはそう簡単ではない」というのもありました。これはラボという組織の体系的な考察が必要です。ラボの教育プログラム（システム）の再考にまでいくのでしょうか。チューターの役割の定義にも関係することでしょう。

通常のラボ活動のなかで ESS(C)が無理なら、当座の対応として、ラボっ子に紙を1枚渡して、家で書いてごらん、面白いよ、書いたら見てあげるからね、というわけにはいかないでしょうか。自宅でわが子が英作文をしている姿をみれば、保護者は喜ぶのではないのでしょうか。ラボの付加価値を高めるのではないのでしょうか。

そして、「英語と日本語を混ぜて書いている子もいる。思いがあふれている。英語と日本語を混ぜてもいいのか」という問いもあります。たぶん、それはよいことだと思います。自分の考えや気持ちを自分の知っていることばで書くわけです。それはバイリンガルがよくやることです。ESSで50語にカタカナを入れた子もいました。それでも、できるならば英語だけで書く練習が必要です。

さらに、「小学生から文字にも興味持って欲しい。書き写しなどの活動からのプロセスをどうするのがよいか」という問いもありました。これは実に重要な問題意識です。上で示したように、文字を読むこと、書く訓練は、子どもの脳神経組織を拡張し、多彩な言語能力、考える力、クリティカル・シンキング、そして多様性の受容や他人への思いやりなどを司る神経回路を強化します。

もっとも、ESSを書くという観点からいうと、書き写しもだいじですが、それ自体が目的ではありません。他人の書いたものを書き写すのは、英語をものにするひとつの手段です。本来の目的は自己表現の獲得です。英語の語句や文章を覚えたら、それらを自己表現でアウトプットしてみる。これの繰り返しがあれば、英語が「身につく」でしょう。

## 5. おわりに

ラボで ESS(C)を効果的に推進するには、チューターによる育成的評価（フィードバック）が望まれます。ラボっ子の作品について、(1) 作品の構想の素晴らしさ、(2) テーマの進め方のよい点、(3) ラボで学んだ英語表現の独創的な使い方、(4) 英語の文法や語彙、などの観点から、励ましとアドバイスをします。曰く、「やってみせ、いって聞かせてさせてみて、褒めてやらねば人は動かじ」（山本五十六）

（注1）ペチューニアの発音をそのまま記述することで、そのひどさを描写する技法は創造的ともいえます。もっとも、一見間違っている言い方も筋が通っているものもあります。ある塾の名前にキャンパス（Canpass）というのがあります Campus の間違えと思いがちかもしれませんが、いやいや、Can pass（合格）のつもりようです。合格と学び舎の二義性が効いています。

（注2）日本人の日本の学校で英語の授業を参観したある有名なオーストラリアの英語教育学者は、こんな感想を漏らしました。この英語観は学校の英語教師だけでなく、ラボのテ

ューターにもあてはまるのでしょう。まさに、言い得て妙です。チューターは自分の能力を自己規制する必要はありません。できることはどんどんやっていただきたいと思います。

I observed a number of English classes, and the first thing that struck me as odd was the use of so-called assistant language teachers, or ALTs. These are often—but not always—Americans, and their job is to assist the Japanese English teacher. They provide help on issues such as the “correct” pronunciation of certain words, and as an Australian, I found it amusing to hear North American pronunciation being modelled as the correct pronunciations. After one class, I was talking to the students and I asked them whether they wanted to sound like their assistant language teacher or whether they wanted to sound like their Japanese teacher. I was very surprised when they all quickly said that they wanted to sound like their Japanese teacher. I should add that there was nothing wrong with this ALT! But the Japanese teacher in this class spoke excellent English with an unmistakably Japanese accent. (Honna/Kirkpatrick/Takeshita, 2017, p.68).

#### 参照文献

Honna, Nobuyuki, Kirkpatrick, Andy and Takeshita, Yuko (2017) 『アクロス・カルチャーズ』 東京：三修社.

Wolf, Maryanne (2008) *Proust and the Squid: The Story and Science of the Reading Brain*. New York: Harpers.

----- (2018) *Reader, Come Home: The Reading Brain in a Digital World*. New York: Harpers.